

関西フィルハーモニー管弦楽団
ニューイヤーコンサート



2014年 **1月19日(日)** 午後3時 開演
甲賀市 あいこうか市民ホール

【主催】 滋賀県、公益財団法人滋賀県文化振興事業団、甲賀市教育委員会
【後援】 エフエム滋賀、しがぎん経済文化センター



この事業は 甲賀市教育委員会
(あいこうか市民ホール)と
(公財) 滋賀県文化振興事業団
が共働して開催しています。



★プログラム★

格林カ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

マスネ：歌劇「タイス」瞑想曲

川上肇 編曲：映画音楽メドレー

モンティ：チャルダッシュ

休憩

ベートーベン：交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

★曲目解説★

格林カ：歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

この曲は、ミハイル・イヴァーノヴィチ・格林カ(1804~1857)が、彼と交友があったロシアの大詩人アレクサンドル・プーシキン(1799~1837)の長詩を、五幕八場のオペラに書き換えたものの序曲である。

曲は二長調、2/2拍子、ソナタ形式である。第一主題部にはオペラの第五幕の最終の婚礼の場面に先立つ華麗な音楽が使われる。冒頭は、せわしなく駆け巡るトゥツティで始まり、バイオリン、ピオラ、フルートに颯爽としたメロディーが現れて発展してゆく。やがて第二主題がピオラ、チェロで始まり、第一主題とは対照的なゆったりとした旋律が美しい。息を潜めるような展開部の

後、次第に再び盛り上がり、激しい弦合奏の再現となる。

この曲で特筆されるのは、終盤のファゴット、トロンボーンがそろって全音階で強奏する下降の旋律である。これは第一幕で悪魔が花嫁を奪いに現れる時に演奏されるモチーフで、格林カが「この世のものではない異様なもの」を表現するために、あえて通常のドレミファソラシドの概念を逸脱した全音階を用いた特別なくだりとなっている。本格的に全音階を使用したのはドビュッシーの歌劇「ペレアスとメリザンド」が最初とされているが、部分的な先例としてはこの曲が最初ではないかと思われる。

マスネ：歌劇「タイス」瞑想曲

バイオリン独奏：松尾依里佳

ジュール・エミール・フレデリック・マスネ(1842~1912)が作曲した歌劇「タイス」(1894年初演)の第二幕第一場と第二場の間奏曲で、その甘美なメロディーによって広く知られている。

元のオペラ自体はあまり知られていないので、「こんなに美し

い曲があるオペラはいったいどんな話なのか!」と興味を持たれたのではないと思うが、実は娼婦と修道僧の恋愛物語である。このタイスの瞑想曲の旋律は、娼婦タイスのモチーフであり、彼女の色香や悔悛、そしてそれに幻惑される修道僧アタナエルの苦悶の曲である。

川上肇 編曲：映画音楽メドレー

バイオリン独奏：松尾依里佳

関西フィルハーモニー管弦楽団トランペット奏者の川上肇氏による編曲で、珠玉の映画音楽3曲をメドレーでお届けします。

●エデンの東

1955年、アメリカ映画
「エデンの東」より

ジョン・スタインベックの同名小説をポール・オズボーンが脚色、エリア・カザンが監督して映画化した。音楽はレナード・ローゼンマン。映画初主演となったジェームズ・ディーンが、人気・実力ともにスターとしての地位を確立した作品として名高い。

●ロミオとジュリエット

1968年、イギリス&イタリア合作映画
「ロミオとジュリエット」より

ウィリアム・シェイクスピアの同名戯曲の映画化であり、フランコ・ゼフィレリが脚色・監督、イギリス出身のレナード・ホワイティングとオリヴィア・ハッセーが主演した。ニーノ・ロータの作曲によるテーマ曲も長きにわたって演奏され著名な映画音楽の一曲とされている。

●ムーンリバー

1961年、アメリカ映画
「ティファニーで朝食を」より

映画「ティファニーで朝食を」は、アメリカの小説家トルーマン・カポーティによる中編小説をジョージ・アクセルロッドが脚本、ブレイク・エドワーズの監督により映画化。主演はオードリー・ヘプバーン、共演はジョージ・ペバード。

「ムーンリバー」はこの映画の主題歌で、作詞はジョニー・マーサー、そして作曲はヘンリー・マンシーニ。1961年のアカデミー歌曲賞を受賞、またグラミー賞では最優秀レコード賞、最優秀楽曲賞、最優秀編曲賞の3部門を受賞した。現在ではポピュラーな楽曲として知られ、ロック・ポップスやジャズなど、音楽のジャンルを問わず数多くのミュージシャンによってカバーされている。

タイトルの「チャルダッシュ」とは“酒場風”を意味するハンガリーの代表的な民族舞曲のことで、もともとはモンティが組織したマンドリン楽団のために作られた曲である。作曲者のヴィットリオ・モンティ(1868~1922)は故郷であるイタリアのナポリで作曲とバイオリンを学び、その後パリに移ってから指揮者業と並行し

て多岐に渡るジャンルの音楽を作曲したが、残念ながらこの曲以外はあまり知られていない。このチャルダッシュは、ラサン(ラッシュー)という緩やかな導入部とフリスカという急速な2/4拍子の舞曲により構成されているので、演奏者はテクニックと歌心のどちらも問われることになる。

ベートーベン：交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン(1770~1827)が作曲した3番目の交響曲で、彼が34歳の1804年に完成された。イタリア語の原題に由来する「エロイカ」の名で呼ばれることも多く、ベートーベンの最も重要な作品のひとつである。

この「英雄」の副題はフランス革命後の世界情勢の中、革命的英雄のナポレオンへの共感から、ナポレオンにささげる曲として作曲された。しかし完成後まもなくナポレオンが皇帝に即位したという知らせを聞いたベートーベンが、「彼もまた俗人であったか」と激怒し、献呈辞が書いてある表紙を破り、楽譜を床にたたきつけたという有名なエピソードがある。そして2年たってから出版されたパート譜には「シンフォニア・エロイカ〜一人の英

雄の思い出を祭るために作曲された〜」とイタリア語で添えられている。

この曲の構成は、それまでのハイドンやモーツァルトなどの古典派の交響曲や、ベートーベン自身の交響曲第1番、第2番からは著しい飛躍が見られる。まず演奏時間が従来の常識を破った50分という長さ、第二楽章には歌曲風の楽章の代わりに葬送行進曲、第三楽章にはメヌエットの代わりにスケルツォ、といったそれまでの交響曲の常識からすると突然変異的ともいえる改変を試みている。そして終楽章にはロンド風のフィナーレの代わりに変奏曲が配置されている。これらはブラームス、ブルックナー、マーラーと続く、交響曲時代に多大な影響を与えたことは言うまでもない。

●第一楽章 アレグロ・コン・ブリオ 変ホ長調 3/4拍子 ソナタ形式

全合奏で主和音が2回鳴り響き、それからチェロが有名な「英雄」のテーマを奏でる。全体は4部からなるソナタ形式であるが、巨大な展開部とコーダが特長である。ベートーベンがその本領を発揮して、精巧に、あらゆる変化を駆使して組み上げた展開部と、その後続く圧倒的なコーダでクライマックスとなり雄大にこの曲を締めくくる。

●第二楽章 葬送行進曲 アダージョ・アッサイ ハ短調 2/4拍子 小ロンド形式

今までに前例のない「葬送行進曲」と題された楽章で、告別式などには単独で用いられることもある有名な行進曲である。弦楽器によって足を引きずるような葬送行進曲のメロディーが登場し、そしてオーボエに引き継がれ、トリオでは明るい響きのオーボエによってうたいだされ、英雄の生前の回想を想わせる。

●第三楽章 スケルツォ：アレグロ・ビバーチェ 変ホ長調 3/4拍子 複合三部形式

完全なスケルツォで、トリオはホルンの三重奏となっている。きわめてのどかに聞こえるが、演奏者にとっては大変苦労するところで、この曲の大きな聞きどころの一つとなっている。

●第四楽章 フィナーレ：アレグロ・モルト 変ホ長調 2/4拍子 自由な変奏曲の形式

終楽章としては異例の変奏曲が用いられている(主題と10の変奏)。ここで使われる主題は、それまでの作品の中で何度も変奏曲主題として使用されてきた、バレエ音楽「プロメテウスの創造物」の終曲のものが用いられている。変奏曲はベートーベンが非常に得意とした形式で、次から次へと聞きごたえのある変奏が続き、やがて徐々にテンポを落とし、短調になり、一息ついた後、急にフォルテになり、最後の盛り上がりへとつながっていく。